

「徳」を可視化する 学級経営

～「遊び心」と「率先垂範」による導入的实践～

執筆 千葉県船橋市立二宮小学校教諭 宮本 将輝

書店へ行けば、多くの教育書が並び、著名な先生方の実践や、それにまつわる哲学などの、いわゆる「教育情報」が容易に手に入ります。しかし、教育書以外から得られる「教育情報」が多くあることもまた事実です。

ふと何気なくほかのジャンルの棚を見ていたところ目に入ったのが、鍵山秀三郎氏の本でした。鍵山氏は、イエローハットの創業者で、現在は「日本を美しくする会」の相談役として、掃除をテーマにした講演や活動などを各地で行なっている人物です。その本には、「平凡を非凡に努める」という副題が添えられていました。

私は、この言葉を見たとき、「人として、かくありたいものだ」と感動したことを覚えています。内容もしびれるものでした。経営者としての成功を凡事徹底によって成し遂げ、その後もおごることなく今もなお率先垂範し続ける彼の「徳」を積む姿勢は、人としての生き様に迫る「人間学」であふれていると感じました。そして、「この感動を、教育実践という形にし、教室で実践したい!」と強く思いを抱くようになりました。

「子どもはどんなときに『よし、やってやるぞ!』とやる気を出し、意欲的に活動すること

ができるのだろうか」

実践を考えていくうえで、この問いは大きなポイントとなりました。

まず、自分に当てはめて考えてみました。私の場合、まず一つめに考えられるのが、「成果を実感できるとき」です。自分のしていることによる成果が、何かしらの形で実感することができているときに、自分の取り組みを肯定的に意味づけ、次のステップに向け「よし、もつとやってやるぞ!」とやる気を出すことができます。

二つめは、「何かおもしろそうだからやってみたいと思うとき」です。やってみる価値がありそうだと判断したものに対しては、やる気を出してがんばってみようと思うことができます。

私がやる気を出すパターンは以上2点に収束されました。そして、これらが今回の実践を支える土台である「可視化」や「遊び心」という視点を生み出しました。

1 金魚袋でゴミ拾い

「足元のゴミひとつ拾えぬほどの人間に、何ができましようか」

これは、鍵山氏が残した名言の一つです。

◀金魚袋をゴミ袋に



アイテムです。そんな金魚袋を一人につき一枚ずつ配り、自分の机の横に常に掛けておかせます。そして子どもに「一日でどのくらいのゴミが拾えるかな」と問いかけます。

この最大の意図は、拾ったゴミ、つまり、自分の努力の成果を可視化させるということです。成果が目に見える、具体的な他者評価・自己評価が可能となり、次への動機づけとなります。また、良い意味での競争心もおおれます。

さらに、気がついたらすぐにゴミを拾え、すぐに収納できる環境づくりとしての側面や、金魚袋がもつ「非日常性」から、つい進んでゴミを拾いたくなってしまおうという心理的な側面などもあり、子どもは進んで足元のゴミを拾うよ

私は、この言葉

から「足元のゴミを拾える子どもへ」と育てるために、金魚袋を活用しました。

子どもにとつて、金魚袋はお祭りで見かける「非日常的」なア

うになりました。

ただ「ゴミを拾え」と言ったところで、主体的にゴミを拾おうとする子どもに育つわけがありません。「何かおもしろそうだからやってみたい」と思わせること、つまり「遊び心」が、まずは必要です。そして、教師自身もマイ金魚袋を持ち、鍵山氏のように率先垂範することで、子どもに刺激を与え続けます。「先生はこんなに拾ったよ」と、子どもを驚かさぐらいの量を見せると、「どこにそんなに落ちているの?」と聞いてくる子どもも出てきます。すると、「あのあたりはゴミがたまりやすいんだよ」といった具体的指導にもつながり、子どものゴミ拾いのアンテナを高めることもできます。

落ちているゴミに気づき、それを拾うことは、

当たり前で簡単なことのように思えます。しかし、それを徹底して継続することは難しく、意識し続けること

◀ゴミを拾う子ども



が必要です。ゴミ拾いは、教室で実践できる身近な「凡事徹底」であり、「徳」を積む行為となるはず。そしてゴミを拾うことが当たり前となった子どもには、ゴミだけでなく、さまざまな物事に「気づく力」が備わるのではないかと思います。

最終的には、金魚袋がなくても自然とゴミが拾える子どもへと育てるために、金魚袋の介入を減らしていく予定です。

2 雑巾には「可視化」、ほうきには「非可視化」

「もともと、世の中に、雑用というものはありません。雑な心でするから、雑用になるだけのことです」

私は、鍵山氏のこの言葉からもヒントを得ました。客観的に見れば、掃除は雑用です。手は汚れるし疲れます。「面倒くさい」と思われがちな活動です。しかし、人間学を求めるのであれば、掃除は「やらされるもの」であってはいけません。「やりたいもの」へとパラダイムを転換していく必要があります。

そこでまず私は、子どもの前で、一人で全力

の教室掃除を行い、手本として子どもに見せました。雑巾には手形がつき、掃かれたゴミは一か所に大量に集まります。子どもの中からは驚きの声を上げた者もいました。



◀手形が付いた雑巾

その後、私は子どもにこう問いかけました。「みんなもこんなふうに、雑巾に手形がつくほど一生懸命拭いたら、これはすごいことだ」

具体的な評価基準が与えられた子どもは必死になって雑巾に手形をつけようと、力を込めて床を拭きます。そして、手形がついた子どもをほめてやり、つかなかった子どもには、明日はついた子どもの真似をするよう励まします。

がんばった成果が目に見える形として残り、成果が出なければ翌日にリベンジのチャンスが巡ってくる。そうすると、子どもは夢中になって雑巾がけに取り組むことができます。時折、教師もいっしょになって雑巾がけをし、子どもと手形を見せ合いながら声かけをしていき

ます。

掃き掃除については、子どもにこう問いかけます。「掃除の時間内に、どれだけこの箱の中にゴミを掃き入れることができるかな」

子どもにとつて、箱の中にゴミを掃き入れるという行動は非日常的で、「遊び

心」の要素が含まれます。そして、どこにゴミ

を掃けばよいのかが明確になるので、この箱の中を目掛けて夢中で掃き掃除をします。

導入では、教師用の箱も用意しておき、どちらがたくさんのゴミを集めることができるか競争します。低学年の子どもに対しては、教師との競争が子どものやる気や意識を高めるための有効な導入の手立ての一つとなります。

結果として、無駄な会話はほとんど聞こえません。そして、最後の最後までどれほどのゴミが溜まったのか見ることができないので、最後の最後まで全力で掃き続けます。そして、最後の最後に、どれほどのゴミを掃くことができた

子どもにとつて、箱の中にゴミを掃き入れるという行動は非日常的で、「遊び心」の要素が含まれます。そして、どこにゴミ

を掃けばよいのかが明確になるので、この箱の中を目掛けて夢中で掃き掃除をします。

導入では、教師用の箱も用意しておき、どちらがたくさんのゴミを集めることができるか競争します。低学年の子どもに対しては、教師との競争が子どものやる気や意識を高めるための有効な導入の手立ての一つとなります。

結果として、無駄な会話はほとんど聞こえません。そして、最後の最後までどれほどのゴミが溜まったのか見ることができないので、最後の最後まで全力で掃き続けます。そして、最後の最後に、どれほどのゴミを掃くことができた

子どもにとつて、箱の中にゴミを掃き入れるという行動は非日常的で、「遊び心」の要素が含まれます。そして、どこにゴミ

を掃けばよいのかが明確になるので、この箱の中を目掛けて夢中で掃き掃除をします。

導入では、教師用の箱も用意しておき、どちらがたくさんのゴミを集めることができるか競争します。低学年の子どもに対しては、教師との競争が子どものやる気や意識を高めるための有効な導入の手立ての一つとなります。

結果として、無駄な会話はほとんど聞こえません。そして、最後の最後までどれほどのゴミが溜まったのか見ることができないので、最後の最後まで全力で掃き続けます。そして、最後の最後に、どれほどのゴミを掃くことができた



◀ゴミを入れる箱

のかを、みんなでチェックします。「今日もたくさん掃けたね」と、みんなで努力の成果を認め合うことができます。最後はやはり「可視化」で、子どもの具体的な努力の成果を価値づけします。

この活動もまた金魚袋と同様に、最終的には箱がなくなってもしつかりと一か所に掃くことができる子どもへと育てるための導入の手立てなので、実態を見ながら箱をなくしていく予定です。

学校における清掃活動もまた、「して当たり前のこと」「いわゆる「凡事」です。しかし、その「凡事」を高いレベルで徹底・継続していくことは、教師の何らかの手立てがなければ不可能です。私はこのような手立てのもと、子どもの生活のなかから「雑」用を減らし、進んで環境整備に励むよう「凡事徹底」の指導をしています。それは結果として、人としての「徳」を積むことにもつながります。

3 「やらなくてもいいこと」をやる

自分の係・当番の仕事に、責任感をもって取り組むことは非常に大切です。しかし、その枠組みに捉われすぎると、係・当番の仕事を終え

た達成感が開放感へと変化し、「後は何もしく
てよい」と子どもは錯覚してしまいます。そし
て、生活の過程で生じるちよつとした環境の綻
び、つまり、「誰の仕事でもない仕事」を見過ご
してしまふ、あるいは、見て見ぬふりをしてし
まふ恐れが出てきます。こうした小さな積み重
ねは、子どもを悪い意味での「他人まかせな人
間」へと育ててしまふような気がします。

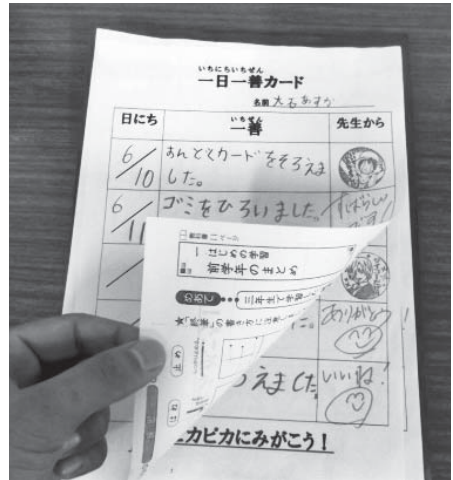
鍵山氏はこう述べています。

「人間は義務でやらなくてもいいことが、どれ
だけできるかということが、人格に比例してい
ると思います」

この言葉は、先に述べた「係当番制」に潜む、
ある種の「落とし穴」の存在を指摘しているよ
うに思います。そこで、私は「一日一善カード」
というカードをつくりました。これは、学校生
活における「義務でやらなくてもいいこと」を
することに對して、子どもに価値づけを行うた
めの手立てです。

「係の仕事でも当番の仕事でもない、クラスの
ためになる仕事を、一日一つでいいから自分で
見つけてやってごらん」

と、子どもに声かけをします。そして、その「一
善」が自分をピカピカに磨くための行いとなる



▲一日一善カード

ことも子どもに教えます。多くの子どもは視野
を広げ、「自分にできることはないか」という視
点をもちながら生活するようになります。

そして、その日に自分がした「一善」をカ
ードに記録し、帰りの会までに教師に提出します。
それに対して教師は、「一枚一枚「いいね！」や
「ありがとう！」「助かったよ！」などの簡単な
コメントをしたり、スタンプを押ししたりし、そ
の行いに対して価値づけをしてから、翌日子ど
もに返却します。カードがいつぱいになったら、
次のカードを重ねて貼っていきます。

教師用の「一日一善カード」も用意します。
教師がその日にした「一善」を子どもと同様に

カードに記入し、教室の片隅に掲示しておきま
す。コメント欄には、教師が行っているように、
自由に子どもがコメントを記入することができ
るようにしておきます。子どもの視点での「一
善」と、教師の大人の視点での「一善」の違いが、
子どもの「一善」の質を引き上げていく効果が
あります。この活動もまた、率先垂範で子ども
に刺激を与え続けます。

これらを繰り返すことで、「誰の仕事でもない
仕事」が放置されていることが減ってきていま
す。さらに、自分のした「義務でやらなくても
いいこと」の蓄積が可視化され、子どもは自信
をつけていきます。そして自己有用感を得るこ
とももつながつていきます。また別の場面で、
不適切な行動をしてしまった子どもに對しての
指導が、「あなたにはこんなに良い所があるの
に、もったいないよ」という、具体的で前向き
なものへと変えることもできます。

気がついたことを自ら行うことは、社会や人
によつては「凡事」です。しかし、子どもは今、
その「当たり前」を築き上げている最中です。
子どもにとつて何を「凡事」とさせるか。この
視点のもと、子どもに「徳」を積ませていると
ころです。

4 「美学」を教える

美学とは「美しさ」とは何かを追究する学問であり、子どもには、

「このクラスにとつての『うつくしさ』って何だろうか。これを考えることが美学だよ」と、教えます。

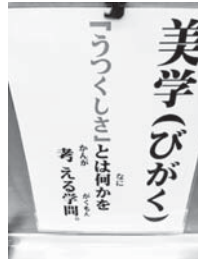
その後、例えば帰りの挨拶の前に一言、

「帰りの美学、がんばろうね。」

と教師が声をかけます。もちろん、はじめは教師が率先垂範で、「美学美学……」とつぶやきながら具体的にどうすることが「美学」であるのかを示していきます。

すると徐々に一人ひとりの子どもが、下校する前に、椅子はしまつてあるか、窓は閉まつているか、掲示物は傾いていないか、ゴミは落ちていないか、といった具合に、不整然な状態がないかどうかをチェックし、それを止してから、教室をあとにするようになっていきます。

このほかにもさまざまな場面で「美学」とい



う言葉は活躍します。教室移動の際の「教室を空ける美学」、食器をきれいに返す「給食の美学」、掃除が終わった後の「雑巾の美学」、カーペットの教室に入る際の「靴の美学」など、使えるシチュエーションは無数です。

ふだん使い慣れていない「美学」という言葉を使うことに、面白味を感じている様子も見受けられ、「遊び心」の要素も含まれます。さらには、子どもから新たな「美学」を言い出すこともありました。

この実践は、「一日一善カード」にもつながります。



▼雑巾の美学

▼靴の美学



「友達の雑巾が落ちていたので、かけ直しておきました」

「お皿をピカピカにして配膳室に戻しました」といった具合に、「美学」のアンテナを高くすることで、「一善」の質の向上に大きくかわつていると感じています。

またその行為に対して、カードを通じての教師からの価値づけも得ることができるので、次への意欲にもつながっていきます。

ポイントは、「ダメな状態」の写真をこっそりと撮りためておき、「美学」のある状態に達したときに、変容の可視化をすることです。具体的に子どもの変容を価値づけることができます。また、どちらが美しく、そして望ましいか、子どもは明確に理解することができます。

はじめは、いわゆる「気がつく子」だけの活動になってしまいます。しかし、具体的な評価や価値づけを積み重ねていくことで、その「気がつく子」の真似をする子どもが増えていきます。そして、その環境が「当たり前」となったとき、クラスとしての「美学の意識」が育ちます。

このことは、子どもにとつての「凡事」の質を上げていくことにもつながり、自然と「徳」を積める子どもへと育てるための、一つの手立

てとして有効であると感じています。



▲「ダメな状態」から「美学」のある状態へ

5 実践から学んだこと

今の子どもにも何をやらせるべきか。その答えへのヒントは、鍵山氏の生き様に隠されています。

凡事徹底。誰かのため、自分のために「徳」を積むこと。

私の求めていた答えであったように思います。これらのことを意識した活動を通して、子ども

もの表情が、何か自信のあるものへと変化していつているように感じます。「何が価値ある行いなのか」を、実践を通して子どもに示し、望ましい方向へと導くことで、子どもは自分の行動に自信をもち、人として育っていくのではないのでしょうか。

また、導人としての遊び心、例えば教師との競争や、金魚袋や掃き掃除用の箱のような非日常的なアイテムの活用、そしてそれらの成果の可視化が、子どもの意欲を高めるということも学ぶことができました。

かつて山本五十六大将が

「やってみせて、言ってみせて、やらせてみて、ほめてやらねば、人は動かじ」

と有名な言葉を残しました。彼も鍵山氏と同様に「率先垂範」を重んじる人物であったことがわかります。やはり、人の前に立つ立場にいる人間にとって、それは必須で、もつべき姿勢なのでしょう。

教師自身が学び続ける率先垂範であるためにも、先人たちに学び続け、子どもを最大限に育てるための新たな実践を生み出していければと思います。

受賞のことば

昨年、大学を卒業したばかりの私は、初めての学級経営に悪戦苦闘。心が何度も折れかけました。そして、そんな自分が情けなくて仕方ありませんでした。

ちょうどその頃、ある同僚の先輩教諭が私に声をかけてくださり、彼とさまざまな学級経営などについてのセミナーに参加するようになりました。そしてそこで、多くの教育実践とそれを支える教育哲学を学びました。自分の教師としての世界がどんどん広がってきました。気になった教育書をひたすら読み、主体的に学ぶことも始めました。それでも、教室ではうまくいかないことのほうが多かったのですが、「教室での失敗は最大の学び」と捉えられるようになりました。

今回提出した論文は、セミナーでの学び、読書、教

室での実践、これら3つの積み重ねの成果を、自分なりの形として残すために作成したものです。ですので、このような形で認めてくださったことが本当に嬉しいです。また、私に指導・助言してくださったすべての方々への感謝の思いは尽きません。まだまだ力量不足の2年目教師ですが、今回の受賞を今後への大きな励みとし、日本の未来、子どもたちの未来のために、日々精進していきます。



千葉県船橋市立
二宮小学校教諭
宮本将輝